



IMAZINE

No.3



2025年10月発行 発行責任：ジェンダー支援チーム学生ピアスタッフ

学生スタッフの軌跡～学生スタッフ、野口凜々子さん～

皆さんはディズニー映画『ズートピア』をご覧になったことはありますか？

先日、今更ながらこの映画を初めて鑑賞しました。結論、なんで今まで見てこなかったのだろう……と後悔するほど良い作品でした。とても面白く楽しい作品で、どの世代でも楽しむことができます。ですが、ポップな雰囲気で見やすい映画でありながら、現在の「多様性」に関する様々な問題が動物たちによってうまく描かれている作品でもあります。例えば、「肉食動物」「草食動物」という生まれ持った属性や、「キツネ」や「ウサギ」というような個々の動物の種類など。それらの描写によって、私たちが生まれた国やジェンダーを通して無意識に持ってしまう偏見や固定観念が表現されています。

さて、私の自己紹介を忘れていました、ジェンダー支援チーム学生スタッフの野口凜々子です！約2年間学生スタッフとして活動してきた私ですが、留学により泣く泣くこのチームを離れることになりました。そこで、今回はたっぷり1面を使用して、今までの活動について振り返っていききたいと思います！

2年前、私はご縁があってこのチームに関わることになりました。まだチームが出来て間もない時期で、どのような活動をしていくのか模索していました。そんな中、学内に誰もが安心して過ごせる場所を作りたい、という思いから始まったのが「セーフスペースKiteKite」です。今は華やかになっているKiteKite部屋（人間学系系A棟110）も、当時は無機質で取調室のような雰囲気でした(笑)。また、学内外に少しでも私たちの活動が広まってほしい、という思いから出展した雙峰祭やTokyo Rainbow Pride（現Tokyo Pride）では、楽しく学べる企画を作るために皆で話し合いを重ねました。そんな私たちの取り組みが伝わったのか、段々と活動に参加して下さる人の数が増え、達成感も大きくなっていきました。そして、ジェンダー支援チームの活動や場所に居心地の良さを感じて下さる人も増えていきました。私は2年目にしてやっと活動の成果が出始めているな、と感じられています。とても長い道のりでしたが、実りある仕事が出来たと思います。

個人的な話にはなるのですが、私は「野球女子」なのです。中学生で野球を始めて今年で9年目になりました。野球というと男子のスポーツというイメージがありますよね。実際、野球をやっているそのことを身にしみて感じています(笑)。だからといって「女子に野球をもっとやらせろ」や「女子の野球チームを作れ」と思っているわけではありません。ただ、「やりたいことがあったらやってみることが大事だ」ということを伝えたいのです。『ズートピア』の話に戻りますが、ウサギのジュディは幼いころから警察官を目指していましたが、周囲から「ウサギの警察官なんていない。お前には無理だ。」と言われてしまうのです。しかしジュディは自分の「なりたい」を追求して、ついに警察官になります。そんなジュディの姿を見て、野球を始めたころの自分を思い出し、あのとき大きな1歩を踏み出せた自分に改めて感謝したいなと思いました。

野球をやってきて、男子と同じフィールドでプレーしたこともあります。正直に言って、体力や筋力には差があるので、技術面で対抗することは難しいです。そのことで悩んだ日ももちろんありました。ですが、野球ができないわけではありません。それに、私の「野球がしたい！」という思いに周囲の方々も応えてくれて、いつも環境を整えてくださいました。そして、9年間野球を続ける中で私には新たな夢ができました。それは「アナウンサーになって野球の実況をする」という夢です。女性がスポーツ実況、特に野球実況をするハードルはかなり高いと思っています。ですが、「不可能はない」ということは過去の私が教えてくれました。

ジェンダーの壁は、高い時もあれば思っていたより低い時もありますし、周囲の人々のおかげで低くなる時もあります。私の場合は家族や友人、チームメイトに本当に助けられました。でも、周囲の環境に恵まれないときもあると思います。BHEのジェンダー支援チームでは、少しでもそんな人たちの力になれるように活動してきました。私はこのチームをいったん離れることにはなりますが、その思いは消えるわけではありません。私が挑戦し続けることで誰かの希望になれるなら、あきらめずに努力していきたいです。

長くなってしまいましたが、これまでの活動で関わってくださった皆さん、2年間本当にありがとうございました！今後のチームのより一層の発展を心から祈っています。



NEWS!

英最高裁“トランスジェンダー 法的に女性と定義されず”判決

2025年4月16日、イギリスの最高裁判所は、トランスジェンダー女性を法的に女性と認めるべきかが争点となった裁判で、「女性」の定義は生物学的な性別に基づくとする判決を言い渡しました。

イギリス北部スコットランドの自治政府は2018年に、出生時に割り当てられた性が男性で、体験・表出する性が女性であるトランスジェンダーの人々について、医師の診断に基づく証明書を取得すれば、職場などでの差別を禁じた平等法のもとで女性として保護されると定めていました。これに対して一部の人権団体は、「『女性』の権利が侵害される」として提訴を行っていました。今回の判決を受け、提訴を行った人権団体からは歓迎の声が上がった一方、国際人権団体アムネスティ・インターナショナルは「非常に失望している」と声明を発表しました。

参考：

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20250417/k10014781531000.html>

アウトティングって知ってる？

アウトティングとは「本人の性のあり方を同意なく第三者に暴露すること」（松岡 2021）です。

個人の性的指向や性自認は他者が決めつけたり、本人の了解なしに本人の知り得ないところで伝えてはならない個人情報です。ロースクールの男子学生が、ゲイであることをクラスメイトのLINEグループに同意なく暴露され、心身の不調をきたし、2015年8月に校舎から転落死した「一橋大学アウトティング事件」は、遺族による訴訟を経て、アウトティングが不法行為であることが示されました。

本人が言いたい範囲、言いたい項目、どこまで誰にどのようないうのか聞くことが必要なコミュニケーションとなるでしょう。

参考：

松岡宗嗣（2021）『あいつゲイだって——アウトティングはなぜ問題なのか？』 柏書房

おすすめコンテンツ：小説編

李琴峰（2021）『彼岸花が咲く島』 文藝春秋

舞台は〈島〉である。物語は、1人の少女が〈島〉に一彼岸花が咲き乱れる砂浜に一漂着し、游娜（ゆな）という少女に出会うところから始まる。游娜によって宇美（うみ）という名を与えられたその少女は、亜熱帯の気候と人のよい島民に囲まれながら、〈島〉の様々な文化を驚きをもって受け止めていく。婚姻制度の不在と多様な家族の形態、幻の土地〈ニライカナイ〉、「ノ口」と呼ばれる女性指導者たち —そして、女性の島民にのみ継承と使用が許される「女語」という言語の存在。

『彼岸花が咲く島』は、先ずもって「言語」についての小説である。物語冒頭、宇美を、そして読者を困惑させるのは、2人の少女の言語の不一致である。游娜が用いる「ニホン語」と宇美が用いる「やまとことば」は微妙に異なっており、無論「女語」とも異なっている。そして、宇美と游娜は「女語」を一他の2つとは顕著に異なるこの言語を一学習しつつ、この言語が女性だけに継承されている理由に接近していくことになる。

李琴峰が美しい筆致の「日本語」で記したこの作品は、言語、歴史、他者、そして未来について、私たちに再考を促すだろう。彼岸花が咲くこの〈島〉で、宇美と游娜がどのように成長し、どのように世界と向き合っていくのか、見届けて欲しいと思う。



HANASO!

IMAZINE では、読者の皆さんのジェンダー・セクシュアリティに関するお悩みやご質問を募集しています。ご応募は下のQRコードから。もちろん匿名でOKです！

※お寄せいただいたお悩みやご質問には、今後のIMAZINEでお答えします。

※ジェンダー支援チームに対するご要望、本誌の感想などもお待ちしております！



Information

ジェンダー支援チームは、全ての学内者が自らのジェンダー・セクシュアリティについて安全に話せる場所、セーフスペース KiteKite (きてきて) を運営しています。詳細は組織のWebサイトからご確認ください！

※その他のジェンダー支援チームの取り組みについても、組織のWebサイトからご確認ください。

※公式 X アカウント @UTsukuba_gst

